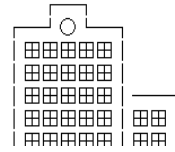


- 信州大学物理同窓会会報 0073 号 (2020 年夏号) SUPAA BULLETIN No. 73 ●
- 2020 年 6 月 25 日発行 ●
- 発行所・信州大学物理同窓会事務局 (<http://www.supaa.com/>)
- 〒390-8621 松本市旭 3-1-1 信州大学理学部物理教室内
- 「旧文理学部物理学専攻」 + 「理学部物理学科」「理学部物理科学科」「理学部理学科物理学コース」のOB・OG & 学生と教職員の会 ■
- Facebook 信大物理 (<https://www.facebook.com/ShinshuPhys>)



はじめに

まだまだ新型コロナウイルス禍が全世界を覆っている。信大では、3月の段階で学生ひとりが罹患していると分かり、4月以降の行事をすべて中止。授業は、前期すべてオンラインで行うことになっている。

新学部長の吉田孝紀先生(地球学)にインタビューを行った5月19日は緊急事態要請の真っ最中だったが、対面での会見を快く引き受けていただいた。お話は、当面す

る「コロナ対策」に多くの時間が割かれた。オンライン授業のこと、困窮学生のこと、たいへん頭を悩ませておられた。

新コース長の長谷川庸司先生からご挨拶をいただいた。やはり「コロナ対策」に四苦八苦されているご様子。一方、米国とドイツに在住の会員から、現地の「コロナ状況」をレポートいただいた。今号はまさに『新型コロナ特集号』となった。(高)

=====《巻頭のこの1枚》 午後的一時 =====



■撮影：倉田富二（理学3S） 早めに仕事を終え、思い立って訪ねた午後の湿原。いわゆる「インスタ映え」とでもいうのであろうか、光線がいつもと異なり、雰囲気もすっかり違って見える。ワタスゲを小刻みに揺らして吹く、少し冷たい風を浴びていると、身体の真ん中から何かが芽生えて来るような感覚に包まれる。 ■撮影日：2014.6.27 ■撮影地：志賀高原・田ノ原湿原

【 I · N · D · E · X 】

◇ 物理同窓会から物理学コースへの寄付による困窮学生とコロナ対策への支援 ・・太平 博久 (2)

◇ |吉|田|孝|紀|理|学|部|長|イ|ン|タ|ビ|ュ|ー|前|編| (3)

●困難をいかに克服し、理学部発展をどう進めるか!? (聞き手：高藤惇事務局長)

◇ 【新コース長からのご挨拶】 ●物理同窓会には今後もご支援とご鞭撻を . . . 長谷川 庸司(8)

◇ 【コロナ関連】コロナ禍による2020年度の大学の授業 志水 久(9)

◇ 【コロナ関連】新型コロナウイルスに関する信大FREEの要請について 馬場 律(11)

◇ 【連載 宮地先生の展望室 8回】新緑のあがたの森 宮地 良彦(13)

◇ |思|誠|寮|列|伝| (其の式) 最高に破天荒だったが最高に懐かしい 根建 恭典(14)

◇ 【コロナ関連】海外事情・新型コロナウイルスにどう対処？

◎ [米国テキサス州ヒューストンから] 恩田 均(17)

◎ [ドイツのデュッセルドルフから] 田中 泉(19)

◇ |思|い|出|の|な|か|の|信|州|大|学| ◆《メソン》があったところ◆

①『メソン』(1984)解題 ～かつて学生や教師が集った凄く楽しい空間があった～ 足助 尚志(24)

② 1989年の銀嶺祭メソンの思い出 来田 歩(28)

◇ 《信大物理卒 若手研究者の歩む道》その3

☆テーマは「銀河の形成や進化」、現在の宇宙の成り立ちを明らかにしたい . . . 杉森 加奈子(31)

◇ |I|N|F|O|R|M|A|T|I|O|N|

→ 信大「知の森基金」活用で1000人の学生に3000万円規模の補助 → 24回総会幹事募集 (33)

◇ |T|O|P|I|C|S| → 思誠寮の太鼓が歴史遺品として旧制松高記念館に保存 (33)

◇ 【訃報】 ■ 追悼 ■ 岡田菊夫さん、どうぞ安らかに 神田 健三(34)

◇ 《再録》「同窓会費」『会計細則』決まる！ (35) ◇ 編集後記 (36)

コ | ロ | ナ | 対 | 策 | 費 | と | し | て | コ | ー | ス | へ | の | 寄 | 付 | に | つ | い | て

□ 物理同窓会から物理学コースへの寄付による困窮学生と コロナ対策への支援 (「信大物理まつもと便り」26号より再掲載)

太平 博久 (理学6S/電子研究室・信州大学物理同窓会会長)

新型コロナウイルスへの対応としての緊急事態宣言が全国において解除されましたが、依然感染防止に向けての厳しい環境の中での生活を続ける必要がございます。リモートでのビジネスは勿論、教育や研究システムなどでも新たな体制・ニューノーマルを如何に構築していくかが、大きな課題となっています。そんな環境の中で、多数の学生・院生たちが生活に困窮する状況にあることも大きな問題です。

私達信州大学物理同窓会は、未だ設立20年ではありますが、同窓会として昔の仲間との懐かしい絆を大切にしつつも、学生・院生向けの就職セミナーなどを通して、現役の学生・院生への支援活動を続けてきております。

この度、現在の困窮する現役の学生・院生への支援ならびに関連対策費として使っていただこうと、物理学コースへ当会積立金から 100 万円を寄付することと致しました。これまで当会に寄せられた会費や寄付金の蓄積の賜物であり、是非有効にお使い頂きたいと存じます。物理同窓会会員各位の大学に対する想いの表れとして、この困難な時期を乗り越えて頂く一助になれば幸いです。

2020 年 6 月

◎ この件に関する会員皆さまからのご意見ご感想を募集しています。特に、学生や院生からの意見や要望をお待ちしています。締切りはとりあえず 7 月 25 日。

・ご意見ページ→ <http://www.supaa.com/postmail/postmail.html>

●吉田孝紀理学部長インタビュー <前編>

困難をいかに克服し、理学部発展をどう進めるか!?

本年度より信大理学部長に就任された吉田孝紀地球学コース教授に、理学部の現状と課題、そして将来ビジョンについてお聞きしました。インタビューに伺った 5 月 19 日時点では、おりしもの新型コロナウイルス渦中にあつて、就任以来、その対応に明け暮れる毎日とか。お話が内容豊富のため 2 号に分けて掲載し、前編では直面するコロナ対策を中心に、後編(次号)で、これまであったバーチャルな組織「信州数理科学研究センター」に加えて 7 月から「宇宙研究所」が開設されるといった研究力、教育力の向上に向けた施策についてのお話をご紹介します。

聞き手は当会の高藤惇事務局長(理学 2S)。

◆ **オンライン授業は、その特性によりビデオがいいのか、それとも同時配信がいいのか、場合によっては PDF を送付するなど 5 パターンほどある**

Q: 本日はお忙しいなか、恐縮です。学部長に就任されて間もないですが、今はコロナの対策対応で大変な状況かと思えます。授業はもう始まっているのでしょうか。

A: いわゆる一般の講義はすべてオンラインとして 4 月から動いています。ただやはりオンラインになじまない講義なり演習みたいなものは当然あるわけで、それは各人先



吉田 孝紀 信州大学理学部長

- ・教育組織：理学部 理学科 地球学コース
- ・所属学会：日本地質学会 堆積学研究会
International Association of Sedimentologists ほか
- ・出身地：岩手県
- ・学歴：出身大学、大学院
1988, 北海道大学, 理学部
1994, 北海道大学, 理学研究科地質学
鉱物学専攻博士後期課程
- ・取得学位 理学博士
(信州大学学術情報 SOAR 研究者総覧より)

生方の工夫によってこれまで運用されてますね。

Q : 4月いっぱい休みで、5月11日から大学が始まるというようなことでしたが。

A : それは通学による授業という前提でしたが、基本的に4月の半ばに前期セメスター（学期）は講義はオンラインでやるということになりました。ただ理学部にとっては、やはり実験実習というのが不可欠ですから、それはもう5月15日から順次開始してよろしいと、昨日からですね、ということになっています。ただいきなりというわけにもいかず、今おそらく始まっているものはいくつかありますが、本格的に始まるのは来週以降かなあと思います。

Q : オンラインの授業というのはどんなことでしょうか。

A : いろんな形態があります。ビデオに撮ってあとで学生さんが見るとかですね。

Q : それはYouTubeかなんかを使ってですか？

A : まあそんな感じをイメージしてください。大学のホームページの中に、再生サーバーはあるんですが、遅くて使い物にならないというのが実状でして…。実はどのくらいの先生方がやっているか実態はわかんないんですが、同時配信ということもやっています。これはいわゆるZoomとかですねGoogle Meetというのを使って、テレビでニュースなんかでよくやっていますが、学生さんにもモニターにずらりと出してもらって、普通の授業のように対面して、物理的ではなくてオンラインで対面して授業を進めるということなんです。

Q : Skypeは使わないんですか。

A : Skypeはですね、例えばファイルを一緒に見るとかその辺の使いにくさというのがあるんですかね。授業の特性によってビデオがいいのか、それとも同時配信がいいのか、場合によっては紙は送りつけてですね、PDFを印刷してもらってじっくりと取り組んでもらうというのもやっています。なので、授業の特性によって5パターンくらいあるかと思います。

Q : 5パターンというのは？

A : ビデオと同時配信と課題を配布、それぞれのハイブリットというか、動画配信で課題を一緒にやるとかですね。3つのパターンが幹線部にあって、その中間形が2つくらいあるということですかね。

Q : こちら（オンライン授業）の方が対面でやるより濃密になりますよね。

A : そうなんです。ただ学生さんは朝から晩までやっていると疲れちゃってダメっていう。パソコンの画面を見続けることになりますから、かなり眼精疲労的な部分があって、なおかつ小さい画面ですからね。注意をものすごく集中しなければいけないし、これを常時やるというのは想像以上にきついなってことが最近わかってきましたね。

Q : そうなんですか。

A : ですから同時配信だけじゃなく、ビデオをあとから見てもらい、それから実際に印刷した紙に手を使って計算する。

それを写真に撮ってもらい、学生から送り返してもらう、というようなパターンが

▼5月19日、理学長室で。左が吉田学部長、右が聞き手の高藤事務局長（撮影：松本圭司）



あったほうが学習意欲を削がなくていいんじゃないかなと、という結論に、最近至りました。そのために1か月かかりました。

Q：怪我の功名といったところですね。

A：ただ、悩ましいのはやっぱり実験をどうするかっていうことになりますね。そういう意味じゃ新たなチャレンジになりますね。そこはまだディスカッションなり経験を蓄積しないと十分な部分はないんですけど、それはそれでとっても伸び代があるんじゃないかと思います。いろんな大学で授業には工夫を凝らしてますから、もしかすると今後ですね、信大の学生さんは信大の講義だけじゃなくて、東大とか名大とかそういったところ、もしかしたら外国の大学の講義を直接受けるというチャンスも出てくるかもしれません。そうすると信大がどうやって選ばれるかという問題にもなってきます。それはやっぱり実験実習かというふうに思います。なのでこういうふうな状況の中で、いかに魅力ある実験実習を組み立てるかっていうのが、次の課題になってきます。

◆ 前期はすべてオンライン授業で、理学部の授業の場合は30人、多くて40人の参加。共通教育の授業では150人でやっています。

Q：先生たちは一応大学に出勤されているということですね。自宅からやっているわけじゃないですよね。

A：自宅からの時もあります。ただ圧倒的に大学からのほうがやりやすいですよ。

Q：そうしますと画面が小さいとかなんとかという問題は、そういうものを供給してあげるといって解決されるのではないのでしょうか。

A：部分部分は解決されるでしょうが、やはり気楽なディスカッションがオンラインだと、ちょっと抵抗があるかなあとと思います。そういう点でも工夫している大学はあって、おしゃべりタイムを作るとかですね、雑談タイムを作るとかですね。そういう風なことをどのように運用していくかということでしょうね。あとやっぱり自宅からやるというのは、学生さんにとってもちょっと抵抗があるみたいです。自分の部屋が映っちゃうとか、自分の発言が全ての他の学生さんに配信されてしまうとかですね。だから、「先生ちょっと解りません」と言いにくいところがありますね。その辺は教員側の工夫が必要です。だけどそこをうまく活かすと、ものすごく濃密な時間を作れるので、むしろ良い効果が生まれるんじゃないかというふうに思っています。

Q：Google Meet だとかZoomの授業で、大体何人ぐらいが出席し、画面に映るんですか。

A：基本的に理学部の授業の場合は30人、多くて40人ぐらいが一単位かと思います。ただですね、学生さん自分のカメラを切ることが多いので、なので名前とかアイコンがだーっと示されるだけで、誰に向かってしゃべっているのかわからなくなることがありますね。まあそれはお互い様なんですけど。共通教育の授業では150人でやっています。これはもうほとんど放送局みたいなもので、学生さんの反応を引き出すことは至難の業なんですけれども。

Q：共通教育と言うのは昔の教養部のことですね。どんどん大学の講義室がいらな
いようなことになってきますね。

A：なりますね。だから大学のあり方って変わるんじゃないかと…。同時に、アン
ケートも取れるんですよ。例えば5択のですね、問題を出して、その場で答えを選
ばせるっていうこともできます。だから例えば3分間時間をやるから考えてって言
って、センター試験みたいに5つ、6つくらい選択肢を出して。彼らは選択するの
得意ですから、ゲームみたいに参加してくれますよ。それをうまく組み合わせてい
くと、結構効果的なんじゃないかと。先生が独言のようにぶつぶつ喋っている90
分よりはとってもいいな～と思います。

Q：そうすると、信州大学はタコ足ですからどこかの学部の授業を、他の学部でも
重複してやっているようですが、一斉にやれば、それはいらなくなりますね。

A：ただそれは信大だけで閉じていけばいいんだけど、東大の授業が取りたいとか
あって、おそらく将来的には可能になるでしょうね。そうすると信大で授業をやる
価値って一体なんだみたいな話になりますよね。ドラスティックに変わる可能性が
あります。おそらくコロナ禍は、1年2年続く可能性がありますから、将来像を見
ながら今できることと将来できること、この2つ両方進めなきゃいけないですね。

Q：試験なんかはどうなるんでしょう。

A：あーそこは深刻です。一斉に試験するっていうのは難しいですね。自宅でやっ
てもらってオンラインで試験なんて、カンニングしちゃいますからね。だからそこ
は非常に悩ましくてですね、可能であれば学校に来てもらうっていうことを実現し
たい。30人規模であれば、例えば着席密度を3分の1にして、ということは3つの
教室があれば可能ですから、とりあえずそれぐらいだと可能ですね。300人だとそ
れは無理なので、変な問題、漠然とした問題を出して「何を見てもいいから誰に聞
いてもいいから30分で答えて」みたいな試験をやってみると面白いかもしれないと
個人的に思っています。

Q：私が50年前に在籍した物理科、素粒子論の試験というのは、朝問題を先生が出
して、夕方までに提出しろっていう方式。他人に聞くのはいかんが、図書館行って
何を調べてもいい、そういうのがありましたけども、逆にそういうことも…。

A：それとってもいいと思うんですよ。ただ採点する側が大変だっていう。30人だ
と何とかかなりますが。100人越えるとね、ものすごいバリエーションの答えが出て
きて、それをどう採点するかって、1人でやるわけですからね。結構厳しいですね。
試験については、面白いアイデアはいくつかあるので、実行できるかどうかは別に
して、チャレンジするのはとてもいいチャンスかなと思います。

**◆ 困窮学生については深刻。学長は「知の森基金」による補助、
理学部では学生アルバイトとしての雇い上げを検討しています。**

Q：大きな変化が起こっているということをお聞かせいただいて、私は驚いており
ます。もう一つの問題として経済的な問題。アルバイトなど学生さんが今までやっ
ていたことが今は難しい。それから授業料も払わなきゃいけない、親が困っている

とか、そういう困窮ということも起こってきてると思うんですがいかがですか。

A：今のところ学生さんのアルバイトは、実はかなりリスクな行動と受け止めていまして、特に飲食店なんかのアルバイトは非常に危ない。その辺を学生さんがよく理解して、あまりそういうことをやらないようにしてくれているんですね。だけど、アルバイトの収入がない状況でどうするかっていうのは、今「解」はないような状態です。大学全体でも考えていまして、「知の森基金」というのがありまして、寄付金で成り立っています。それを活かして本当に困窮している人には補助をするということも学長は考えているみたいです。

Q：理学部独自の取り組みを何かお考えでしょうか。

A：理学部としては、困窮している方を優先的に学生アルバイトとして雇い上げて、それでアルバイト代として補助できないかというふうなことを考えて今動いています。ただ1日飲食店で時給千円で5時間やるというのと比べると、なかなか難しいですけどね。何らかの補助にはなるような気がしますので、学生さんを雇いあげるといって前向きに考えようとしています。

Q：文科省の方で授業料を半額にするとか、支援金を渡すとかって案が出ているようですが、あるいは政党の方からそういう意見が出ていますが、そういうことを具体化しているのでしょうか。

A：先々週位の全学の会議でその話は出まして、学長は「なかなかありえないんですよ」ってことは言っていました。というのは、結局、今年だけの問題ではなくて、もしかしたら来年も続くかもしれない。そうなるコストというのは皆で分かち合うべきじゃないかと。今年の学生さんだけ、利益を享受するということはやっぱりおかしくて、それで長い時間でもって皆でコストを負担しあい、それで教育の維持とか向上を図るべきだろうと。というので今年だけに限ってどうかするということは論理的におかしいんじゃないかというような話でした。

Q：ただ親の仕送りが難しくなり、学業を継続できなくて大学を辞めざるえないと考えている学生も相当数あるようですね。

A：本当に困っている人がいるということが現状ですから、そういう人たちにはむしろ手厚くですね、援助するというやり方の方が見合っているんじゃないかというふうに僕も思います。なので授業がなく授業料を払うのはおかしいという声も理解できますが、それ以上にこれからコストを支払わなければいけないと思います。それはむしろ皆で分かち合いましょうということの方が賛同を得やすいんじゃないかと思います。

Q：例年にないいろいろご苦勞があつて大変ですけれども。コロナ問題で何か付け加えていただくとしたら。

A：禍を転じて福としたいですね。長い目で。

(以下次号)

新コース長からのご挨拶

物理同窓会には今後もしもご支援とご鞭撻を

長谷川 庸司 (信州大学理学部理学科物理学コース長 高エネルギー研究室 教授)

今年度のコース長を拝命した長谷川庸司と申します。コース長になるのは今回が初めてになります。

☆ 受験倍率の極端な低下、積極的に「出でて活路を見出す」必要

昨年度は理学部の入試委員長を拝命し、大学入試に関して、より広い視点で見ることができました。大きな入試制度改革として、昨年後半の英語の外部民間資格試験の利用や国語や数学の記述試験導入延期のドタバタがありましたが、大学入試共通テストが今年度の入試から実施されます。昨年度の入試にも導入の影響が現れる可能性がありました。受験生は合格する可能性の高い大学を選択する安全志向となるか、それとも、大筋の試験方法は変わらないため例年通りの動きをするか、我々も志願者の動きをつかみかねていました。

蓋を開けてみて、物理学コースにおいては、後期日程入試の受験倍率の大幅な低下から判断すると、受験生は安全志向だったように感じられます。昨年度の受験倍率の低下は極端でしたが、18歳人口は減る一方なので、志願者を増やす不断の努力が課題となっています。国立大学でさえ待っていれば志願者が集まる時代ではなく、このままでは「座して死を待つ」ことになりかねず、積極的に「出でて活路を見出す」必要があります。しかし、魔法の解決法はありません。

☆ 入学式の中止、前期の対面授業の中止や教職員の在宅勤務……

昨年度の個別日程入試では新型コロナウイルスの影響が懸念されましたが、幸い、試験実施には影響がありませんでした。しかし、今年は新年度が始まって大学キャンパスは静かなままで、極めて異例の年度始めとなりました。入学式の中止に始まり、年度始めの様々な学事が中止となりました。前期の対面授業の中止や教職員の在宅勤務などの感染拡大防止対策が講じられ、こちらも幸い、大学関係者の感染もごく限られたものでした。現時点では長野県の感染の広がりには限定されていますが、気を緩めるわけには行きません。新型コロナウイルスとともに生活する新しい生活様式が取りざたされています。



大学でも、オンライン授業に代表される、新しい授業の形態の模索など、早急に取り組まなければならない課題が多々あります。新しい授業形態では、これまで対面で行ってきた授業と同様の教育効果を担保する必要がありますが、まだノウハウの蓄積が乏しく、様々方法を手探りで試している状態で、ましてや、教育効果の検証には至っていません。ノウハウの蓄積には時間がかかりますが、学生は在学期間が限られており、それを待つことができません。この事態は教員だけでなく、学生にも大きな負担を強いています。深刻な現状を表す例として、多くの授業で課題が課せられ、それがあまりに多く手が回らない、という相談が学生から寄せられています。特に新生は大学での学習とはどのようなものかを理解する前に、このような状況に置かれたため、体調を崩してまで課題をこなす時間を確保しているとの相談がありました。精神的に参ってしまう学生も出てきています。

☆ 希望の光はこの状況を克服するネットワーク環境の充実があること

さらに、新型コロナウイルスの影響は、現在大学に在学中の学生だけでなく、将来大学に入学してくるであろう高校中学小学校の生徒児童の学習環境に大きな影響を与えるため、影響が残り続ける可能性があります。このような状況のもとで学生をいかに教育するかは喫緊の課題であり、かつ、今後長く取り組まねばならない課題です。

先の見えない状況のなか、希望の光は、現在は、ネットワーク環境の充実、様々な電子情報機器の発達により、なんとかこの状況を克服する環境が整っていることです。この状況が10年、20年前であれば、もっと困難な状況に直面していたはずですが。発展してきた情報化社会の恩恵を受けられるのですから、それを学生教育に活かすのは大学側の責務と考えます。

物理同窓会の皆さまの中には、物理学コースへの影響を憂慮されておられる方が多いと思います。物理学コースといたしましては、このような困難な状況の中で、物理同窓会から陰に陽に多くのご支援をいただき、大変感謝しており、心強く思っています。今後も物理学コースへのご支援とご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

■ コロナ禍による2020年度の大学の授業

志水 久 (理学 92SA/信州大学理学部物理学コース 物性理論研究室准教授)

□□ 教員にとっては初めての試みで、手探りしながら実施

2020年はコロナ禍により卒業式の縮小，入学式の中止をはじめとして多くの変更を強いられました。3月31日には前期授業は5月10日まで通学によるものは実施しないとの通知が学長から発表され、学生の構内への立ち入りが禁止になり、各教員はそれぞれの知恵と工夫を凝らしてインターネットを利用した授業(オンライン授業)をすることとなりました。

小中高等学校と異なり、大学のインターネット環境はよく整備されており、信州大学でもいわゆるeラーニングシステムが10年ほど前から導入されていたため、各教員が全てを自分で何とかするという状況ではありませんが、それぞれの教員の才覚に頼ったオンライン授業をすることになりました。また、オンライン授業は学生側にも相応のインターネット環境とPCが要求され、学生に不利益が生じないように、学生の環境の調査及び補助が実施されています。

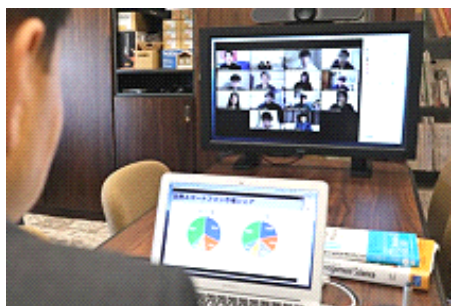
当初の通知では5月10日までということもあり、15回の授業のうち月～水は3回分、木と金は5回分がオンライン授業のはずでした。大学の授業は授業期間が定められていますが、このコロナ禍によって文部科学省は授業の内容を保証すれば実施方法については寛容な態度を示したため、学部によっては5月10日まで授業は行わない(5月10日以降の授業で予定していた内容を全て実施する)とした学部もありました。

前述のようにオンライン授業の回数がそれほど多くなかったため、4月初旬は理学部でもあまり深刻に考えている人はいなかったと思います。しかし、緊急事態宣言が出されたことによって前期は全てオンライン授業となり状況は変わりました。理学部で実施しているオンライン授業の方法としては

1. 教科書や講義資料をpdfなどで提供する
2. オンライン会議用ソフトを利用したリアルタイム授業
3. 授業をビデオに撮影してオンデマンド提供

の3つになります。いずれの方法も全ての教員にとっては初めての試みで、手探りしながら実施しています。現在オンライン授業を開始してから2ヶ月ほど経ち、

それぞれの教員は自分のやり方が定まってきたと思われます。しかし、それぞれの方法が学生にどのように受け取られているのか、またどれくらいの教育効果があるのかは、教員自身把握しにくいので、これから検討すべきことになると考えられます。また、期末試験や成績評価についても、これまで行ってきた方法と比べて遜色ない方法を模索していくこととなります。



▲大学におけるオンライン授業の一例
(日本経済新聞WEB版より)

長野県の緊急事態宣言解除を受けて、学生実験と卒業研究や大学院生の論文指導の対面での実施については、各研究室の判断で徐々に再開されていますが、今後の状況によってはオンラインに戻る可能性があります。

■ 新型コロナウイルスに関する信大 FREE の要請について

馬場 律 (理学部数学科3年/信大 FREE 代表)

FREE

高等教育無償化プロジェクト
student advocacy group since2018

▲会のロゴマーク

□□ 高等教育における学費・奨学金について問題意識を持つ学生の集まり

私たちは、信大 FREE という学生団体です。

FREE とは、高等教育における学費・奨学金について問題意識を持つ学生が集まっている学生団体

で、経済的に困っている学生の実態を世間に伝えたり、国会・省庁などへの要請行動をしたりすることで、最終的に高等教育の無償化や、奨学金制度の拡充などを達成できるように活発に活動を行っています。はじめは東京の学生が始めたのですが、徐々に活動が広がって現在では全国の様々な大学で支部を持ち活動しています。

信大 FREE としてはコロナ渦以前にも、学生の経済的な実態を知るためのアンケートを集めたり高等教育無償化法に関して支援できる学生の枠が後退してしまうことに対する署名活動を行ったりするなどしていました。

そのように活動してきた中でコロナ渦が起きました。今回、これまでバイトをして生計を立てていた学生や親からの支援を受けずにやってきた学生など苦しい思いをしてきた学生はもちろんのこと、そうでない学生に対しても大きな経済的ダメージを与えました。そのような学生の声を国政の場に届けるために、また私たちのための支援策を実行していただくために、そして今回のコロナ渦を通じて日本の学費の高さについて皆さんに考えていただくきっかけにもらうために、私たちはこれまでのところ、

- ・新型コロナウイルスに関する学生生活の影響を調べるアンケートを行う
- ・アンケートの結果を受け、大学側に要請する

の2つの行動を行いました。これらについて報告させていただきたいと思います。

□□ アンケート結果にもとづく5つの要請

[アンケートの結果について]

5月6日時点での信州大学内でのアンケート結果より、※2020年4月9日～5月

6日 回答数 43 グーグルフォームにて回収

- ・オンライン授業で経済的負担が増える学生→27.9%
- ・コロナでバイトによる収入がなくなった学生→29.3%、減った学生→43.9% 合わせて73.2% (バイトの収入を何に使用しますか? (複数回答) では、生活費→80%、学費→12.5%)
- ・コロナで親の収入が減る/無くなるなど、家計に悪影響があった学生→62.8%
- ・休学を考えている学生→2人、退学を考える学生→1人

特筆すべきは休学や退学を考える人がアンケートに答えていただいた43人中で3人もいるという事実です。また、バイトの収入を生活費や学費に充てているという学生は本当に多いのですが(このこと自体が大問題なのですが)、いわゆる「命綱」になっているアルバイトの収入がなくなってしまう人、減ってしまう人がかなり出てきている、という状態になっています。またそのような中で一定数の学生は休学・退学を考えるまでに追い込まれているようです。コロナのせいで学業を続けられない学生がいたらそんな教育は平等とはかけ離れているように思います。

以上のようなアンケートの結果を受けて、他大学では独自の学生支援策を行っていることもふまえて、要請を行いました。

【要請について】

5/20に大学側に要請文を送りました。要請項目は以下です。

- 1 学生支援のため、全学生一律に今年度納付金(入学準備金・授業料)を半額にする。
- 2 経済的に影響があった学生に、大学独自の10万円の緊急支援金を給付する。
- 3 オンライン環境の整備を支援する。オンライン環境やその通信の強弱によって成績に影響が出ないように配慮する。例) ルーターの無期限貸し出し。ルーターの導入によりかかった費用・電気代などの補填。通信容量を無制限に変更したときに生じる費用に対する補填。課題や小テスト提出、試験の際に、通信障害が起こる場合に柔軟に対応する。
- 4 授業料の納入期限を今年度末までに延長する。
- 5 上記の達成のため、信州大学として国に対して大学の予算を増やすよう要求する。

1については、信州大学内の施設を使えなかったり、実習に行かせてもらえなかったりしたことなど、「教育サービスが受けられなかったため」という意味もありますが、学生やその実家などの授業料を負担している所への経済的損害があったから、という意味が大きいです。また、今回の要請を布石にして、これからFREEとしてやっていきたい、そもそもの学費を下げるという動きにつなげていきたいという狙いもあります。

5については、今回FREEは全国としては国会への働きかけもしているところですが、合わせて私たちが信州大学にも働きかけることによってより強く私たちの声を届ける、という意識を持って入れてあるところです。

要請の最後にもありますが、今回のコロナ渦で浮き彫りとなっているのは、バイトをしなければ大学に通えない学生がいるということです。これはそもそもの学費が高いこと、奨学金も給付型のものを得るためには厳しい家計基準を満たさなければならないこと、の2点に帰着します。今より学費を安くして、今より充実した奨学金制度さえあれば、経済的な理由で大学を諦めてしまう人がいなくなり、日本国憲法にある「教育の機会均等」が保障され、国際人権規約にある「高等教育における漸進的無償化」を導入することができます。

私たちは、国民の皆さんが学費・奨学金の問題に意識を持っていただけるように、活動をより強く進めていきます。コロナに関しても必要な要請や実態調査など続けて行っていければと思います。



宮地良彦先生の 展望室



■ 第8回 ■ 新緑のあがたの森

2020.5.24

宮地 良彦（元信州大学学長/名誉教授 物理同窓会名誉顧問 松本市在住）

===
(^^)
o-o-))

【最初の赴任地であった文理学部、旧制松本高校の校舎は先生にとって、ひとし思い出深いものがある。あがたの森を訪れるたびに、昔の出来事がよみがえってくるという。公園となっていまも人々のなかで生きている……。】



コロナ禍はまだまだ収まる気配を見せないが、五月の声とともに松本のあがたの森にはいつもの新緑の季節がやってきた。校門から一步入るとヒマラヤ杉の見事なアーケードが一直線に伸びている。南仏のエクス・アン・プロヴァンスのミラポー通りもやはりスズカケ並木が夏でもひんやりした涼しさを作っていたことを思い出す。こういう天井の高い広々とした空間の中に入ると、日ごろの抑圧感が取れてスッキリした気持ちになる。

あがたの森は私が初めて教師生活に入った思い出深い場所である。当時はヒマラヤ杉が伸び放題で講堂前は昼間でも薄暗かった。立ち小便をとがめる学部長に「そんなこと言ったって途中では止まらない」と言い返した学生。二日酔いのもうろうとした頭で行った未熟な講義。この森には懐かしい記憶がいっぱい詰まっている。



▲新緑のあがたの森（旧制松本高校）の中庭に立つ「岳人像」（撮影：高藤 惇）

緑のアーケードの下で子供を遊ばせながらお話に夢中な母親たち。落ち着いた色合いの旧制高校記念館。ベンチに腰を下ろし

て本を読んでいるのは先ほどレストランで食事をしていた東京風美人だ。古い校舎に囲まれた中庭の岳人像の前に憩う熟年夫婦は旧制松高の卒業生だろうか。二人乗りの自転車でさっそうと走り抜けてゆく高校生や陽光あふれる芝生の広場でバドミントンに興ずる家族連れ。思誠寮入り口にあった櫨の大木の下では、夏になると才能教育の生徒のバイオリン合奏が聞かれたものだ。

松本独特の表情を持ったこの公園は私の大好きな場所のひとつである。

思誠寮列伝 其の弐

最高に破天荒だったが最高に懐かしい

旧制松高が1919年(大正8年)に創立されて101年。創立と同時に思誠寮が建てられ、1年生は全員が入寮したという。その後、完全自治寮として信大文理学部にそっくり移管。理学部創立以降も、県の森から横田へ場所は移ったものの、思誠寮の名称はそのままだ、伝統は脈々と受け継がれている。数々の青春のドラマが展開されているが、思い出となる出来事や事件を元寮生たちから回顧してもらおう。



根建 恭典（文理9回/松崎研究室 元思誠寮長 当会名誉会長 東京都調布市在住）

☆☆ 初めに寮の電源が切られると同時に太鼓が鳴り出し、2階の住人が一斉に下駄を踏み鳴らすと共にデカンショ踊りで全寮を踊りまくる。寮はぐらぐらと揺れる。新寮生はおろおろ……。



松本高等学校が創設されたのは大正八年であった。寮の自治寮要求の騒動が起き、二代大渡太郎校長になって、自治寮が確立され、解体されるまで続いた。寮は思誠寮と言ひ、南、中、北寮の三棟で定員 120 名であったが、信州大となって女子寮が併設され 25 名が別地に設立され、食堂は思誠寮で一緒だった。

1. 自治寮に入るためには入寮面接があった

自治寮に入るのに入寮面接がある。毎年新生を約 60 名前後入れるが、この時、寮委員は 2 つの点だけを重視している。一つは寮費を確実に支払うことができるか？ 次は団体生活に耐えられるか？ 面接を受ける方からすれば金がない者が入寮させてもらえると考えるが、自治寮として寮費で食費をまかなっており、滞納があれば食事の質を下げることとなる。「寮に入ったら、アルバイトをして支払う」では入寮はできない。実際は、奨学金を受ければ月 3 千円であり、学費が月割りで 500

円、寮費が 2200 円で支払いは可能である。

次に団体生活は精神力である。当時、松本駅から浅間温泉までボロ電車が走っていた。駅から学校まで乗ることが出来た。この電車に乗っての感想を聞くと「恐ろしい電車でした」不合格、「優雅な電車でした」一次合格である。次が入寮日である。当日の夕食には学部長はじめ補導委員の先生を数人招待し、各人に 1 合の酒が付く、これは大学生になったから大人であるとの



▲廊下に置かれた太鼓は「召し太鼓」と呼ばれ、寮生に集合を掛けるとき打ち鳴らされた。普段は食事の支度が出来た合図に炊事夫さんが叩くので、「飯太鼓」と呼ばれ、豪勢な食事のときの音は大きかったという

意味で学部長も黙認である。

その後、旧寮生による、でたらめな自己紹介と、くそ真面目な新生の自己紹介で終了する。その後、酒でぐっすり眠ったところ旧寮生が呼び起こされてストームの準備が始まる。中寮二階にふんどしに下駄履き姿で十人前後がそろい、下では太鼓と電源係が位置に付く。まず初めに寮の元電源が切られると同時に太鼓が鳴り出し、2階の十人が一斉に下駄を踏み鳴らすと共にデカンショ踊りで全寮を踊りまくる。

2. 一人ぐらい異常者が出るほど手荒い新寮生歓迎行事

新生生はあわてて電灯を点けようとするも付かず、寮はぐらぐらと揺れる。更に旧寮生は、タライに水をくみ階段の上から掛けるのである。これに耐えると寮生になれるのである。この時、異常者が一人ぐらい出ることがある。旧寮生はこれを要注意者としてマークしていくことになる。それでも年に一人は異常者が出て、正月

に上高地の警察から「お宅の寮生がズック靴で歩いているので引き取りにきてくれ」とか、種々なことが年に一回はあったと思う。寮では、ストーム、す巻き、布団蒸し、寮雨、洗面器ですき焼き鍋等々が行なわれていた。

寮は、自治寮として8人の寮委員がおり、全て寮内の諸問題を決めていた。寮費と現金封筒は舎監が取り扱っていた。規模は小さな自治会であったが、秋に記念祭があり、寮生が、仮想行列をし、太鼓を叩いて市内を一回りした。また、寮生は市内近郊の女性が寮内に立ち入る案内をし、各室は奇智をこらした飾り付けがなされた。

旧寮は、6帖に二人と12帖に四人が入っていたが、その後改良して。すべて6帖にされた。12帖では、蚊帳が寮で付いていたが、6帖になって不足となり、学校側に要求したところ、「下宿するときは、蚊帳は各人が持つていくものだ」との学部長の発言で、前2期の委員は成功しなかった。

小生が委員となり、補導委員との会合で、「寮は勉強するところである。蚊帳の中で勉強するのは本来の姿ではない、蚊帳ではなく、網戸を付けて欲しい」と発言したところ「ふん、分かった。事務長、予算計上しとけ」で解決した。後で補導委員の先生から、あれは名演説だったよと褒められた。



▲70年ほど前の思誠寮の仮装行列（写真提供・根建恭典）

3. 女子寮の看板事件

あるとき、女子寮の委員から「男子寮には表札の看板があるが、女子寮には看板が無いので付けて欲しい」との要求があり、「委員会で検討しよう」と言っておいたら、翌朝、女子寮5か6人で委員長室に押し掛けてきて、「あんな看板を誰が欲しいと言った。貴方がもってきたのだろう」と犯人扱いされた。寮委員会を開いて、昨夜酒を飲んだ者を探し出すと某君と分かり、委員長室に呼び出して「女子寮に看板があるので、返してこい」「はい」その看板は、警察、中部電力、金光教の三枚であった。

寮には、一年か二年いて「勉強するので、下宿する」と言って寮を出ていく、特に理系が多かった。しかし、下宿入っても勉強しないのは、同じだろうと四年間滞寮していた、当時後輩の物理科生は七名おり、皆優秀であった。



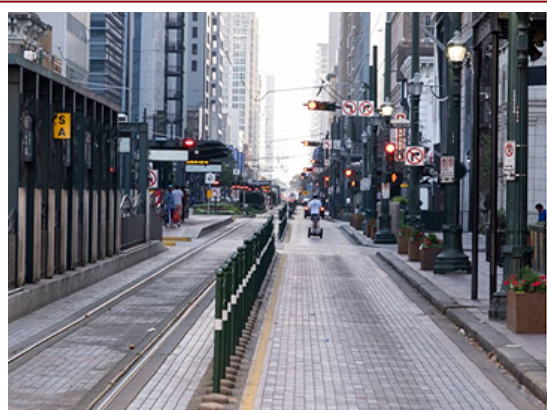
米国テキサス州ヒューストンから

年初より世界的に勃発した新型コロナウイルスの猛威は、患者数は数百万人・死者数十万人に達してまだまだ終息の見通しが立っていません。日本では、初動の遅れや後手後手の対応に政府への批判が根強い状況ですが、高温多湿の夏場を迎えて、一定の拡大は抑えられてきました。外国ではどうか、世界各地に住む信大物理卒業生に当地の様子を寄稿いただきました。まずは最大の患者数を擁する米国から。

恩田 均 (理学 11S / 物性論研究室 Solution Architect, Unconventional Software Technology, Schlumberger シュルンベルジェ社、ソフトウェアテクノロジー部門所属 米国ヒューストン在住)

30歳の時に日本を離れて以降、転勤でアメリカとフランスを行ったり来たり32年が過ぎました。だんだんと日本の情勢にも疎くなって来ていたのですが、昨今のCOVID-19の地球規模の蔓延が始まって以来日本からのニュースも日々チェックできるようになりました。これもマスコミの発信するニュースのWebアクセスやTV

番組のLiveストリーミング等が技術的にも内容的にも充実してきたおかげです。中には政府や自治体の方策への批判も良く聞かれますが、大局的に見て日本は本当によくやっていると思います。これも日本人の特質である集団的行動の賜物かなと思います。これは誇るべきことです。その一方、マスコミからの非常に片寄った報道も多く見られます。偏向した情報を鵜呑みにするのではなく、私達個人個人が報道の裏にある真偽を見極める必要性を今特に感じています。



▲車と人影の消えたヒューストンのダウンタウン (写真提供：恩田均/以下も)

●● 在宅勤務も3か月目に入り、生活もオンライン化が進む ●●

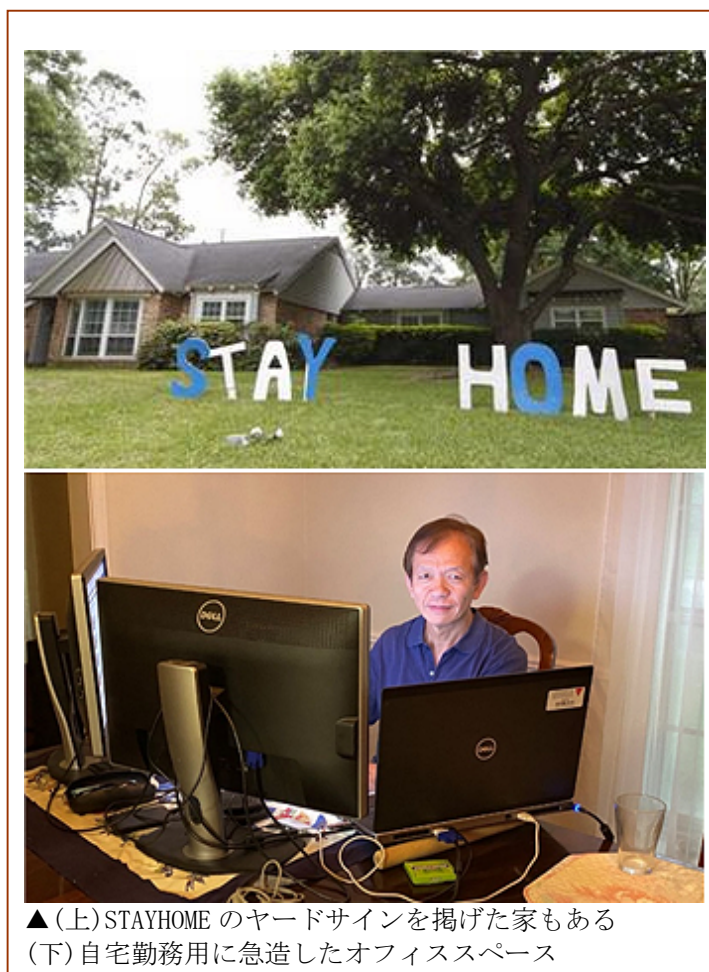
アメリカではホワイトハウス(政府)の方策に少なからず問題がある中、個々の自

治体（州や郡）の主導、裁量で種々の施策が行われています。現在住んでいるヒューストン(テキサス州ハリス郡)においても Stay Home、Social Distancing は徹底しています。

私自身は在宅勤務 3 か月目に入りました。毎日の生活では軽いランニングと犬の散歩時以外は外出していません。日々の生鮮食料品や日用必需品の調達もすべてオンラインでの注文です。配達完了の連絡は SNS テキストやメールで通知されるという、直接人と人が接しないようにとの徹底ぶりです。スーパーマーケットでは、60 歳以上の市民のために早朝時間帯が確保されています。このように生活のための基幹産業の物流を支える人々と住民を守ることに重点が置かれているのです。

妻は学校の教師をしています。ここまで自宅から Zoom 等を用いて毎日授業を続けています。IT 環境の比較的整った当地でも、クラスで生徒達と直接対面する授業形態からオンライン授業へとスムーズに移行したわけではありません。最初の一週間は生徒達は休みで、教師達のオンライン授業用のツールの使用法や指導法のトレーニング、次の 2 週間は生徒たちがオンライン授業に慣れ親しむ期間として宿題は無し、など段階的な対応がありました。

娘はハワイ州の病院で勤務しています。そこでは医療崩壊を防ぐためにすべての医療部門をそれぞれ 2 チームに分けてお互いの時間と動線の交わりを断ち、万一どちらかのチーム内で感染者が出た場合でも医療サービスが中断しないようにと配慮されています。その分医師一人一人の勤務時間は大幅に増加しているわけですが。



- 今回のパンデミックで労働形態が根本的に変わった ●●
- 教訓や反省から新しい社会を作るのは私達の責任と行動 ●●

当地では多くの住民や基礎産業従事者がこのように対策を徹底していても、感染の収束のスピードはなかなか減速してきません。私たちに今明らかなのは人類は今後新型コロナウイルスと長年にわたって付き合っていく必要があるということですので。新型コロナウイルスやその後の新たな感染症と共存していくためには、新しい生活や労働形態（Way of Life、Way of Work）を個人としても社会としても受け入れていかなければならないと思います。

実際に、現在勤務する職場を含む多くの場で、今回のパンデミックで労働形態が根本的に変わってしまったと言われていています。これまで当たり前と思っていた慣習が、意外と他のやり方でも大丈夫だとかむしろより効率的だという発見です。これから、私たちが今経験していることからの教訓や反省を生かし、新しい社会を作る必要があります。そしてそれを実現させるのは、私たち一人一人の責任と行動です。

(2020年5月12日・記)

新型コロナウイルスにどう対処？



ドイツのデュッセルドルフから

毎日コロナなしでは済まない時世になってしまい、他に浮いた話もないので、ドイツの現状を報告したい。本邦の様子を知らず、私個人の心境と感想だが、判らないことだらけだ。最初はいずれ何時かは感染するし、一度罹ったら免疫が付くから早めに済ませたいと暢気に考えたが、大きな勘違いだ。私自身7年前に癌を、去年は心臓麻痺を患い、この4月で70歳となり、まさに既往症付き高齢要注意人物なのだ。(田中)

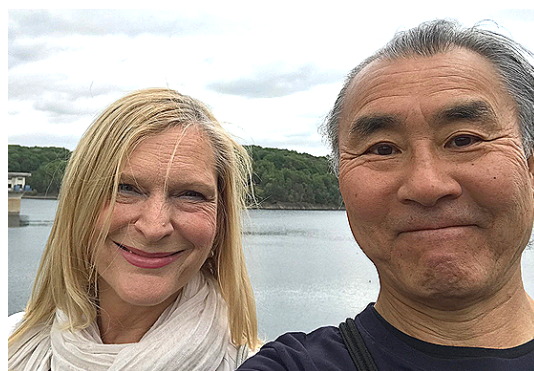
田中 泉 (理学4S/ 統計研究室 1998年からドイツ税理士 デュッセルドルフ(ドイツ)在住)

●● 現在の状況

《 ロックダウンは約8週間継続し、同居家族以外の者との「接触制限」、政府の対応は早かった 》

3月上旬から感染者数、死亡者数が連日急上昇し、またイタリア、スペイン等のより緊迫した実情が報道され、市民の不安が増大した。そして政府はこの状況に対し素早く反応し、市民及び企業の救済策を講じた。次期選挙では勝ち目がないと言われた連立政府が、超

特急で市民生活を大幅に制限する一方で、救済措置に巨額の赤字予算を組み、あっという間に立法化してしまったのには、私も驚いた。野党側がまともな反対意見を構築出来ないうちに、そして一般市民の危機感が高揚しないうちに、政府主導で大きく舵を切ったという印象だ。



▲奥方との2ショット、お互い歳取ったな…

ドイツは地方の主体性が強く、連邦政府の枠組みの中で各州が独自の規制を作る。そのため、臨機応変が可能となるが、他方で不統一も起こる。ここ3か月の間に、各州で数百の法令が制定され、無数の解説書、指示書、FAQなどが公表されている。生活現場のレベルで、合法・違法の区別が付かない状況が多くある。すでに規制緩和に入っているが、政府は100,000人当たりの新感染者数が50人を7日連続で超えた地域では、従来の厳しい規制に戻すことを条件としている。

このところ市民の危機感も定着し、禁欲体制を積極的に受け入れる人達が増加したと同時に、状況に不満足で、また経済回復のために規制解除を要求するグループとの乖離が目立ってきた。政府は感染拡大が再発することを恐れるが、このままでは企業・経済が壊滅する危機感も強く、規制解除を要求する大規模なデモが各地で起きている。心配は、左右の過激派が状況を利用した勢力拡大がみられることである。

シャットダウンは約8週間継続し、その結果、市民の事業、生活、娯楽、あらゆる活動が大幅に制限され、経済はマヒした。レストラン、カフェ、学校、幼稚園、教会、老人ホーム、映画館、食料品以外の小売店、一般大衆を対象にするすべての業種は閉店を余儀なくされ、スポーツ・文化サークル、あらゆるイベントが禁止された。



▲中世の殿様 Jan Wellem の像の前に立つ筆者

ドイツでは「接触制限」と呼ばれ、同居家族以外の者との接触を制限する規制だ。1.5メートル以内への接近禁止、店舗や公共的な屋内空間でのマスク着用義務がある。5月11日から、一部業種は再開されたものの、人数制限や保健対策が義務付けられた。営業再開と共に新たな経費増と不安

が待ち構えており、原因が経営上の失策ではないだけに、頭の痛い問題である。いずれにせよ多くの企業が倒産に追い込まれ、戦後最大の不況となることは間違いないだろう。連邦も州もコロナ対策で今年の予算を50%以上も拡大した。

ドイツでは小規模事業者に対し9,000 EUR（約百万円）の支援金が有税で支給され、サラリーマンには時短による減給補填や、納税期限の延期などの処置がとられた。日本のように全国民に一律支給という方式はとられていない。

莫大な借入で、天文学的な金額で感覚がつかめない。政治介入しないと大変なことになるという、恐怖感かもしれない。それで大変なことが回避されたとして、そのお金の出元はどこか？ 金は天下の回り物だが、今回の借金は誰が、いつ、どのように返済するのであろうか？ まったくピンと来ない。

●● ハインツベルグレポート

《 2月末、当市から約50Kmのオランダ国境の町のカーニバルで集団感染が発生して大騒ぎ。ボン大学の研究チームが調査結果を5月上旬に公表。 》

ドイツのホットスポットの一つが、私が住むデュッセルドルフから約50Kmにあるオランダ国境のハインツベルグという田舎町だ。2月末は今年のカーニバルに当たり、ライン河周辺ではどの町でも恒例のパーティーが開かれていた。ミュンヘンのオクトーバーフェストを各町が一斉にやっているような状況だ。数百人が一堂に会して、どんちゃん騒ぎとなる。肩を寄せ合って座り、立ち席でも満員電車並み。大量にアルコールが入り、大声で歓談し、無礼講で皆さん恥のかき捨て、羽目外しっぱなし、という有様で、ウイルスには最適な状況となる。そこにオーストリーのスキー場からコロナを拾って発症前の人々が居て、たちまち村中で感染者だらけの大騒ぎとなった。

この事件をボン大学の感染症研究チーム（80人の科学者）が調査して、その報告が5月上旬に公表された。その報告内容を見ていろいろ考えるとところがあった。

このケースは局地的環境での出来事であり、感染実態を掴むのに好都合であった。約12,000人の住民から無作為抽出で600世帯に調査協力を依頼し、919人（405世帯）の同意を得て、医学的な検証が行われた。その結果、実際の感染者は母数の約15%、調査以前に認識されていた約3%をはるかに上回る数字だった。

また感染しても無症状の人が20%も居たこと、感染者に対する死亡者は0.39%と意外に低いという結果が出た。もちろんこれを他地域やドイツ全土に拡大解釈することは正しくないし、報告書もそれを強調している。しかし好都合な部分を料理して面白い「事実」に仕立て上げるのはマスコミの得意技であり、ニュースでは当時のドイツ全体の死亡者6000人に、死亡率0.39%を逆算すれば、ドイツ全体で1,800,000の感染者が居る/居たことになり、今報道されている感染者数の10倍近くになる、という話で反響を呼んだ。

●● 統計・因果関係検証の難しさ

《 ドイツの政治家はよくやっている。科学者の意見をよく聞き、良識のある慎重で大胆な対策を推し進めている。もしかしたらドイツ民族の特長かも 》

毎日報道される数字であるが、沢山の疑問が残る。一つは信憑性だ。ドイツの公式機関 Robert Koch Institute または、US の Johns Hopkins Uni. などが公表しており、政治行政の判断ベースになっている。信憑性に欠けると言っても、他にまじな情報がないから仕方ない。また因果関係（感染メカニズム）も解明されておらず、それで効果的な対策が打てるのか、という疑問が湧く。テスト件数を増やせば、感染者数も確実に増えるだろう。マスコミの言うのも何となくわかるような気もする。

もう一つの問題は、統計の時差だ。潜伏期間が2週間もあり、現場のテスト結果が統計に載るまでのタイムラグは、感染時から数えて約3週間あるという統計家がいる。もしそうならば、統計情報で議論している政府の行動様式はナンセンスだろう。本当の姿は3週間後にしか見えないのに、いま見える（3週間前の）情報で判断をしているということだ。特に今、規制緩和が叫ばれる理由に、感染者数の減少があげられるからだ。ここ2週間位は特にR-指数（再生産数：一人が何人に感染させるかの係数）が1.0を下回ったから峠を越したという主張が目立つ。絶対数、タイミング等は多くの事情で明確ではないが、感染の推移は、富士山を高くしたような標準分布を描くと私は思う。本当に峠を越したのだろうか。アメリカもアフリカ、中南米も急上昇中を続けているというのに。

ケチを付ければキリがないが、ドイツの政治家はそれでもよくやっていると思う。不透明ながらも、科学者の意見をよく聞き、良識のある慎重で大胆な対策を推し進めているのが見える。この点ではもしかしたらドイツ民族の特長かもしれない。

●● 一般市民の意識改革

《 握手や抱擁の習慣は当分忌諱されそう。いま握手の代わりに拳や肘を突き合わせる挨拶が流行している。マスクは定着したというよりしないと行動が制限される状況 》

全ての市民の意識をこれほど短期間に大きく変えた出来事もないだろうと思う。環境問題は人類存続の危機だが、多くの人は、自分の生きているうちは大丈夫、自分だけ頑張っても所詮無意味などと考え、効果が上がらない。しかしコロナは、今日自分が感染する可能性があり、原因が見えな



▲(上) マネキンもマスクで一種のモード (下) 入店制限で順番待ち顧客もマスク着用と1.5m接近制限

いだけに、切実な恐怖感を与えた。罹ったら肺だけでなく、脳や循環器もやられる、ワクチンや治療薬は早くて1年先などという報道も不安を掻き立てる。今市民の価値観やモラルが急速に変化しており、ある程度の共通意識が形成されるまでには、沢山の失敗やトラブルがあるだろう。経験も確信もなく、先が見えない状況で、ヒステリックになった個人の言動は千差万別だ。

概して欧州人はアジア民族よりも、身体的接触が密だと思われる。私もドイツへ来たばかりの頃は、他人と体が触れる度合いや頻度に、カルチャーショックを受けたものだ。通常は会った際に、赤の他人なら握手する、親しい人とは肩や背を抱き合う、もっと親密や親族ならキス（異性の場合だけ）というのが普通のドイツ人だ。たぶん握手や抱擁の習慣は当分忌諱されるだろう。いま握手の代わりに拳や肘を突き合わせる挨拶が流行っているが、定着するだろうか？ マスクは完全に定着したというより、そうしないと行動が制限される状況だ。多くは簡単な紙マスクや手作りマスクをあごに掛けて街を歩き、店に入るときに口鼻に掛けなおしている。

今後の企業や組織運営にも大きな変化がある。例えばレストランの営業再開に当たり、保健義務が課される。テーブルの間隔を広げ、客は食事をする時以外はマスクを付け、自分の連絡先を残す義務を負う、レストランの従業員は完全にマスク着用で、他にも消毒液の用意や、定期的に換気など色々あり、これらは経営を圧迫する。しかし当局が取り締まり、違反には罰則を科すので無視出来ない。

その努力をしても、店で感染者が出た場合には、最低数週間は営業停止だろう。さらに違反と断定されたら、罰金・懲役となり、再起不能かもしれない。法令は抽象的な表現になり、個々のケースで解釈の違いは当然に起こる。保菌者が来ればどんな厳重に規則を守っても感染するだろうし、他の業種ではそれ程の規制がないのも、不公平、不合理感が残る。特定業種の経営者には踏んだり蹴つたりの状況だが、今回の不況は裾野が広く不安が多い。今後沢山の悲喜劇があり、多くの企業が破綻するだろう。それは環境の変化には付き物だが、常に弱者が淘汰されるのは、自然の成り行きだろうか？

今回もネット上でいろんな情報を漁ったのだが、とにかく正しい情報を取るのが非常に困難であることを改めて実感した。とにかく情報の展覧会で、陰謀説もまことしやかに暴露されている。中国の仕業だとか、ビルゲイツが犯人だとか、ありとあらゆる利害関係が絡んでいて、真実が見えない。その反面、忘れ去られたテーマがあるのにも気づく。環境問題、Friday for future、難民、BREXIT、メルケル首相の後任者などはどうなったのだろうか。

(2020年5月31日・記)

『メゾン』(1984) 解題

～かつて学生や教師が集った凄く楽しい空間があった～

■1970年に4年になった2Sの有志が大学祭の一環として出店した喫茶店「メゾン」が始まりだった。その後、紆余曲折はあったようだが、1970年代後半～1980年代には物理学生と教官が集う学内の“自由酒場”のようなカタチで復活していた。当時を知る卒業生は、口を揃えて懐かしむ。そんなふたりに当時を振り返ってもらった。

足助 尚志 (理学17S・12SM/物性理論研究室 凸版印刷株式会社)

▲▼ 本当の意味で物理学科がまとまったのは3年目の『メゾン』だった

信州大学に入学後、最初の1年は教養部の所属であった。物理学科の40人に満たない新入生は、前半は数学科、後半は化学科と組み合わせられ、学科としては分断される。そのため「物理学科」としてのまとまりはなかなかつかずにつかなかった。

物理学科の学生組織P連（この組織はある年代だけにあったもののようなので、どこかで記録に残しておきたいものだ）主催のソフトボール大会や自主ゼミ（物理に入学したなら内山龍雄『相対性理論』（岩波全書）と量子力学（テキストはなんだった？ シッフ？）などで、かすかにつながりはあるものの、くさび型カリキュラムと称した1コマだけ、理学部の授業『物理学概論』（本来は理学部2年生対象、物理学科だけ1年生が受講、受験を経て理学部物理学科に合格したものの、1年次は教養部所属となる新入生に理学部の雰囲気や先行で味合わせようと企画されたもの。前半期 鷲坂先生の電磁気学、後半期 勝木先生の特殊相対性理論（「エントロピーの目でみた生命と環境」が開講されるのはこの数年後））で全員の顔が揃っても、これとて大教室でまとまって座るわけでもなし。2年生で漸く1つの学科として物理学実験や必修科目で顔を合わせても、なんとなくよそよそしい。前半と後半の交わりはなかなか深くない。本当の意味で物理学科がまとまったのは3年目、3年生が主体となって運営する飲み屋、銀嶺祭で引き継がれてきた『メゾン』であったと私は思う。

今回、メゾンについての思い出を書いてみようということであるが、年代によってメゾン自体が変容していると思われ、別の年代の方の記事も掲載されることを期待する。



▲▼ 当時の大学は 24 時間、学生たちのものだったと言っても過言でない

私たちの時（1984 年）に一番の課題だったのは、開店時間についての大学管理側との交渉である。かつて大学は 24 時間、学生のものだった、というのは言い過ぎだろうか。銀嶺祭で理学部の各学科が出店する飲み屋は、24 時間営業だった。それが許されなくなり、私たちの時には、前半 2 日間は 22 時、後半 2 日間は 24 時まで、になったと記憶している。大学側との交渉に立つのは大学祭実行委員あるいは理学部自治会だったはずだが、この話ができる人間には別途原稿を依頼したい。私たちの時は物理学科から大学祭実行委員長を輩出していた。頼まれると断れない性格の福澤義仁君は、後に理学部学生自治会の役員も務めることになってしまった。民青、新聞会のような政治的背景を持たない役員は珍しかった。

銀嶺祭、理学部は講義棟が中心となった。2 階の一部は『物理の散歩道』などの学生本分の企画。22S の来田さんがこの時のことを勝木先生との関わりの中で書かれている(0061 号 : 2017 年夏号)。当時は主に 2 年生が担当する分野、といっても私たちのときには、大した公開実験もできていなかったように思う。記憶しているのは、入場口の足下に He-Ne レーザーを飛ばして、レーザーの到達点に焦がした紙を置いて、『足下注意』と貼っておくと、入場者がレーザー光を避けるためにピョンと跳ぶ、それを面白がって見ている。今にして思えば、ヒドイことをしている。それをやったのは I 君だったと思うが。



大学祭、理学部にとっての裏メイン、それは各学科が出店する飲み屋である。講義棟の 3 階は飲み屋街と化す。中でも最も強力なのは地質学科が営む『ちしつや』であった。地質学科の特徴は他学科よりも少ない人数、1 年生から巡検などで寝食を共にする機会も多く、理学部の中では特にまとまりがよい学科であった。『ちしつや』は升酒、和風居酒屋だった。数学科は『浮世亭』、化学、生物は失念。

対して物理学科は前述したような理由で、まとまりが悪い学科の代表だ。なんとなく先輩方から『メソン』という店名とともに、やることを引き継いだ。恐らく必須科目であった物理学実験の後、皆で役割分担を決めたのだと思う。物理学科でメソンというのにもベタなネーミングであるが、宮地先生を通して湯川の孫弟子である我々にしてみれば、ある郷愁とともにそれなりの意味を持っていた。

『ちしつや』とは違い、どちらかといえばカクテルを主たるメニューとしていたので、カタカナで『メソン』というのは割にマッチしているネーミングでもある。ただ一般の人が意味を理解していたかはわからない。当時流行っていた漫画、高橋

留美子『めぞん一刻』と『メソン』、同義に捉えている人も多かったのではないか。意味は全く違うが、私は宣伝担当として、当時は著作権なんのその、結構無茶（高橋留美子先生、ますむらひろし先生、ごめんなさい）をやりながら、パンフレットに載せる宣伝やらマッチのデザインやらをやった。

▲▼ 講義棟 8 番教室が店舗、5 階の物理実験室が料理をする後方支援基地

講義棟 8 番教室に店舗は設定、暗幕を掛け、カウンターを机で組み上げた。5 階にあった 3 年の物理実験室は料理の下ごしらえをするための後方支援基地となる。宣伝、チケット、食料調達（日本シリーズの結果は、食料調達に重要な意味を持っていた）などをしながら、開店の日を迎える。

理学部は昼間、少なくとも午前中は眠っている。健全な（？）大学祭は当時の教養部中心でサークル活動の中で展開されている。各種サークルに参加している者は、そちらの方で忙しかったりする。明るいうちの理学部は、前述した学術的展示や昼は喫茶店の顔をしている店舗などが活動している。

夕方となり、教養部の出し物が閉ってくるにつれて、理学部の別の顔が動き出す。人の移動が始まる。これからの時間に備えて夕方まで寝ている者、昼の大学祭を終えてから夜の部へと登場する者。理学部全体が別の顔へと変わっていく。講義棟の 3 階を中心として、人が集まってくる。店の切り盛りが始まると、とにかく忙しくなる、飲み屋でアルバイトをしている者がカクテルを振る。料理に酒、それらが目まぐるしく回る。こうなると、自然と手が足りてなさそうなところに人が入っていく。自分ができる範囲のことでメソンに参加する。包丁を持てるものは野菜を切り、料理が出来ない者は 5 階から 3 階まで料理を運ぶ。協力体制ができていく。当初から決めてあったことではあるが、不思議と皆、一生懸命に働き出す。

こういうお祭りに出没する先輩連中は無茶振りをする。先輩風を吹かせる。「次は Schrödinger だ」とか「Bose-Einstein 凝縮だ」といってわけのわからないカクテルを作らされていた H 君、S 君、I 君。恐らく再現性のないそれらのカクテル。本当はレシピを作って伝えていくものではなかったのだろうか。大体、カクテルに理屈を求め、なぜこのカクテ



▲1989 年銀嶺祭のときに 2 日間開いたメソン。その終了時に写した集合写真。はじけている様子がよく分かる（写真提供・来田歩）

ルが Einstein なのか説明をさせる先輩は、先生よりもタチが悪い。無論、そういった先輩たちはお金を沢山落としていく。混沌の中で時間は過ぎていく。

何日目かの朝、メソンにいくと店長であった I 君が「本当に上手いコーヒーを飲ませてやる」といって一杯のコーヒーを入れてくれた。こんな一面もあるのだ、そんな人となりを知る機会がある。

▲▼ 軽音楽部とのコラボが成功、結構儲かって打ち上げの費用となった

我々の時代の『メソン』で、特筆すべきこととして、軽音楽部とのコラボがある。理学部の軽音楽部としては、3つほどのバンドしかなかったはずだが、バンドの数が少なすぎたことが原因か、当時の教養部での会場が確保できなかったからなのか、理由は覚えていないが、銀嶺祭での発表の場を探していた。そこで『メソン』でやるのはどうか、ということになったのである。私はメソンと軽音楽部の間に立ってプログラムを決めたりした。というか、私が軽音楽部の一員だった。如何に狭い教室に楽器をセッティングし、終わったらスムーズに片付け、元の店舗の状態に戻すかに腐心した。例えば、演奏の時間は人が増え出す直前に設定するのである。かき入れ時には座席数が減ってしまう、というあざとい考え方である。しかしそれが成功するのである。音が鳴っているとなんとなく人が入ってくる。他の学科の店舗よりも、音楽が鳴っているメソンには人が入る。音楽というのは偉大だ。どんなに下手な演奏でも（失礼）、人を呼び寄せる。私たちのバンドは3年生では、キーボードとボーカルは女性で教養部から迎え、数学科のU君、K君と組んだ。4年生の時は男だけだった。

音楽というのは偉大な力を持つ、人を引き寄せるだけではない。前述したように、この年の課題は営業時間。前年24時まで営業できたものが、前半2日間は、22時までとなっている。果たしてお客様を納得させて時間通りに帰すことができるか、という悩みがあった。力尽く、強制退去だ、いや、相手は先輩である場合もあり、かつ酔っ払いだぞ、簡単なようで意外とやっかいだ。これを解決するアイデアとして、誰からの発案だったのか（私だったかな？）「蛍の光を流したらどうだろう」というものがあつた。パチンコ店の発想。

早速、バンド出演が決まっている軽音楽部メンバーにお願いをし、音源を作ってもらった。キーボードで弾かれたそれは、悲しくも郷愁の音であり、カセットテープに納められて『メソン』に届けられた。そして、実際に閉店10分前くらいから流された。するとどうであろう、客は帰り支度を始めて、大人しく教室を出て行くのだ。「閉店です、閉店です」のアナウンスを繰り返すこともなく。人の習性というのはかくも不思議なものだ。なお、その音源を弾いたのは、現在信州大学理学部で数学の研究・教育に携わる栗林勝彦教授であることは、特に記しておこう。

飲み屋は儲かる、水商売とはよくいったものだ。大学祭で学生が利益を出してどうする、ああッ、打ち上げで使うのか。結構儲かった。大学祭後、暫くしてから『しづか』の二階で打ち上げを行った。払いはすべてメソンでの利益だった。物理学科3年生の全員が集まった。これが銀嶺祭、『メソン』の効果だった。

大学祭から数週間後、バンカラ風学ランを身にまとった学生たちが大太鼓を叩きながら松本の街に繰り出す。思誠寮祭だ。そこから松本の秋は一気に深まり、冬の足音が聞こえてくるのであった。

(2020.5.26 記)

1989年の銀嶺祭メソンの思い出

■足助さんから5年後に入学した来田さんは、入学当初に旧制松本高校からの伝統を引き継ぐ「口上」の洗礼を浴びて大きなカルチャーショックを受ける。そしてメソンである。もうひとりの自分「君」にたくして、当時を回想し綴ってもらった。

来田 歩 (22S/物性論研究室 株式会社科学工房未来 代表取締役 福岡県糸島市在住)

△▽ 新歓の飲み会后、今日知り合ったばかりの先輩と肩を組んでいた

メソンといえば、湯川秀樹のパイメソンのことで、銀嶺祭で、物理学科3年生が2日間開店するレストラン&バーであった。念願の物理学科入学した君は、新入生歓迎の飲み会が終わり、先輩たちに、松本城に連れていかれる。そこで、伝統芸であるデルタ関数とかを目の当たりにする。したたか酔っぱらった君は、気がつくと、今日知り合ったばかりの先輩と肩を組んで、円陣を組んでいる。円陣の中心で先輩が、大声で、前口上なるものを叫ぶ。



「風紀名門の子女に恋するを純情の恋と誰が言ふ」

おっー！ と、肩を沈めての合いの手をする。

「路頭に迷える女性に恋するを不情の恋と誰が言ふ」

おっー！ 腹の底からだす大声に、なんだか気持ちよくなってくる。そして、こんな具合に前口上は、合いの手を挟みながら、続く。

「泣いて笑って風月月下の酒場に媚を売る女性の中にも水蓮の如き純情あり
風吹けば風吹くがよし 雨降らば雨降るがよし 酒は飲むべし百楽の長女
は抱くべしこれ人生無上の快樂なり 妖色美女の膝枕に快樂の一夜明くれば
夢もなし 又、金なし いざや歌わん 思誠寮歌 春寂寥 1番から3番まで
Eins、Zwei、drei！」

ドイツ語だ。

なんだか、歌の意味はわからんが、これが、大学生というものか、かっこいいなあ。そして、皆が、肩を揺らしながら、春寂寥なるものを歌うというか、なんか、うーうーなって、揺れている。肩を揺らすので、何ともいえない一体感を感じ、酔っぱらっているの、気持ちよくなる。これから、物理の飲み会の後には、何度とくりかえす、この儀式、結局君は、春寂寥の歌詞を覚えなかった、ただ、うーうーなりながら、肩を揺らす。

最後は、エールの交換をしあって、妖色美女の膝枕に快樂の一夜を明ける経験もしたことのない初心な君は、物理学科の一員になった高揚感が残る。

△▽ カクテルを出すおしゃれな物理学科のレストラン&バーとして…

そう、物理学科3年生が開店するメソンの話であった。

物理学科2年生は、「物理の散歩道」という夏休みの自由研究の発表みたいなことをやる。

君は、メソンより、こちらの方が、肌にあって、「乱流」というテーマで、竜巻発生装置とか、ブラウン運動模型などを作って、展示して、冊子も作る。

なにかとリーダーシップを発揮しはじめた君は、流れて、メソンでもリーダー的存在になっている。君は、大風呂敷を広げるだけだが、あとは、まわりが、うまく畳んでくれる。カクテルを出すおしゃれな物理学科のレストラン&バー。カクテルメニューを決めようと、バーテンダー役の友人の家に集まり、友人が作るカクテルを、普段は酒を飲まない若い君は、次から次へと仲間と味見して、ひどく酔っ払い、帰りの道で女友達の肩を抱いた。

出店をつくろうとチーズケーキを、これまた女友達の家で作った。自炊で身につけた腕を、当日は発揮して、スパゲティから、カレー、豆腐ステーキ、豆腐田楽、ほぼパン粉の手捏ねハンバーグを提供する。厨房は水もガスも使える物理学科の実験室。メソンは渡りの2階にあって、廊下をはさんで隣の教室は、地質学科の「ちしつや」という飲み屋があり、「ウルトラハンマーロック」という色んな酒をちゃんぽんにして、記憶がなくなってしまうものを出し、しばしば、2階の窓から人が飛び降りたりしていた。物理学科は、あくまでおしゃれである。

お金を落としてくれるお客さんは、物理学科を卒業し、社会人になった先輩方である。この日のために懐かしい松本を訪れる。そして、伝統になっていたメニューにないオードブルを頼む。たとえば、「オードブルビックバン」とか、「オードブルFFT」（高速フーリエ変換のこと）とか。



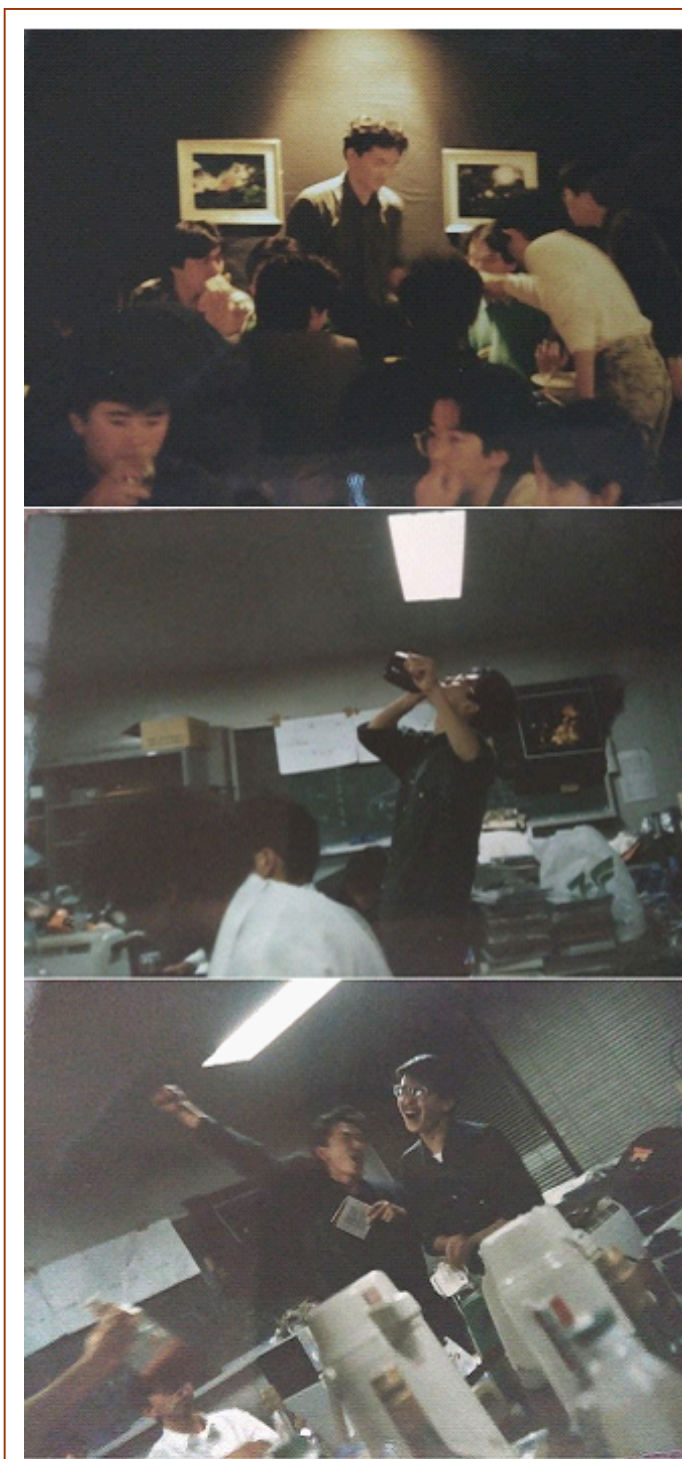
物理の専門用語での注文で、知らない言葉だと、教科書とか、理化学辞典で調べる（今のように、スマホでぐるぐるなんて、なかった）。「オードブルビッグバン」を作って、スタッフに持っていかせると、先輩方は、料理長を呼べとなる、そこで、君は、呼ばれ、降りていき、これが、なぜ、ビッグバンかを説明する。先輩は、納得するまで離してくれない。君は、中心に豆腐を丸く、くりぬき、砂糖を混ぜた赤味噌を焦がして、上にトッピングしている。これが、ビッグバンで、中心はブラックホールみたいなものを表現している。まわりに、チキンナゲットを配している。

これは、膨張していく宇宙を表現していると、説明しても、先輩方は、納得してくれない。想定内の問答に、宇宙の膨張を示す、チキンナゲットは、光に近い速度で遠ざかっています、なので、と、君は、持ってきた赤いケチャップを、チキンナゲットの上から、中心に向かって、ひく。チキンナゲットは、光に近い速度で遠ざかっているの、赤方偏移するんです、と。ここが、料理長の見せ場である。

□□ 中島みゆきの「ファイト！」を叫び、友人は「テキーラを飲み干して」「ふらふら」になった

最終日の後片付け、実験室での皿あらいが、持ち込んだCDラジカセによって、カラオケ状態になって、余ったお酒で、皆が、酔っ払い、歌う。君は、中島みゆきの「ファイト！」を、叫ぶ。友人は、中島みゆきの「テキーラを飲み干して」で、テキーラを飲み干し、中島みゆきの「ふらふら」で、ふらふらになる。物理科のひとたちは、中島みゆきが好きなので、中島みゆきの曲が多く流れている。

後片付けというか、カオスになって、う



▲〔上〕OBの方に、「オードブル、ビッグバン」を、料理長として説明する筆者（中）同期の山口氏は中島みゆきの「テキーラを飲み干して」の曲で、実際にテキーラを飲み干す。写真は宇井氏のパフォーマンス。（下）中島みゆきの「ファイト！」を絶唱し、全員でキューレツに盛り上がった（写真提供・来田歩）

るさいからと、止めにきた吉江先生も、「差し入れです」となんか持ってきて、飲みだすシマツ。朝まで騒いだ。物理が好きで、合コンとか、酒を飲んで騒ぐより、正準方程式を解いていたかった君は、いつの間にか、お祭り騒ぎの中心にいて、とても貴重な体験をして、卒業後も、メソンを訪れて、今度は、難解なオードブルを頼む立場になる。

物理が好きな人たちが、そして懐かしい信大松本が好きな人たちが集まる場所、それが、メソンだった。メソンには、寺澤修先生が、いた。吉江寛先生も、いた。もっと上の先輩を知り、物理を志す後輩を知る場所でもあった。そんな場所がなくなって久しい。2Sの高藤さんたちが、始めたメソンは喫茶店だったという。1989年には、こんな場所になっていた。そんな場所が、もう一度、作れないのかなあと、君は、今、思っている。

《 次代のイノベーションの担い手たちの追跡レポート 》

信大物理卒 若手研究者の歩む道 その3

当会報 70 号に収録された 22 回総会での兼松泰男阪大教授の講演録に「最も大事なものは、イノベーションを牽引するのは若手です」と強調されています。では、信大物理卒の若手はどうしているのか？ 大学、研究機関、民間企業を問わず研究に奮闘する“いま”をご本人にレポートしていただくことになりました。新シリーズの3人めです。

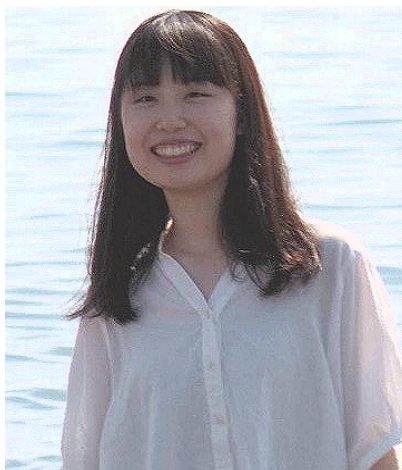
【 信大物理卒 若手研究者録(3) 】

■ テーマは「銀河の形成や進化」、現在の宇宙の成り立ちを明らかにしたい

杉森 加奈子 (016S/観測天文学研究室 総合研究大学院大学物理科学研究科

天文科学専攻 三鷹市在住)

◇ アドバンスという先進授業や様々な外部プログラムへの参加がきっかけに



私は昨年度観測天文学グループに所属していました。今年度から総合研究大学院大学の天文科学専攻に通っています。

まず、卒業後に総研大に進むことにした経緯についてお話しします。私は信州大学に入学する前から天文学や宇宙物理学に興味がありました。研究について詳しく知るために、大学3年生のときにアドバンスという授業を履修したり、研究を体験できる外部のプログラムに参加した

りました。

外部のプログラムというのは国立天文台・総合研究大学院大学主催のサマースチューデントプログラムや東京大学宇宙線研究所主催のスプリングスクールです。そこで宇宙初期の状態を明らかにするための装置開発や、観測天文学の研究を体験させていただきました。体験を通して自分が研究したいことや自分に合っていそうなことについてよく考えることができ、研究室選びや、大学院で研究してみたいことを考える際にやっておいてよかったと思いました。

◇ いまは授業もオンライン、英語を使う機会がとて増えました

総研大は様々な研究機関に付属した大学院となっており、天文学専攻は国立天文台に付属しています。天文学専攻の学生数は1学年あたり1~10人と少なめですが、修士課程がなく、5年一貫制となっています。そのため博士課程に進みやすい環境です。また、天文学専攻では准研究員制度があり、経済的な支援が充実しているため、研究に集中できる環境が整っています。

大学院での研究テーマは銀河の形成や進化についてです。すばる望遠鏡のHyper Suprime-Camという撮像装置で取得された観測データを解析することで、銀河の性質を調べます。これによりどのようにして現在の宇宙になったのかを少しでも明らかにしたいと考えています。

現在はCOVID-19の影響で大学院に登校できず、大学院での同級生にもほとんど会ったことがありません。授業もオンラインで受講しています。研究は指導教員とこまめに連絡を取り、論文を読んだりデータの解析方法を学んだりしています。

また、天文学専攻には留学生が多く、授業や報告会、新着論文紹介などでは英語を使う機会



が増えました。私は英語が苦手であるため、苦勞していますがとても勉強になっています。

学校に行けず思うように勉強が捗らない日もありますが、散歩をすることや大学の時の同級生や兄妹、大学院の先輩たちとオンラインの飲み会をすることが息抜きになっています。少しでも早く学術論文を書けるように頑張っていきたいです。

I N F O R M A T I O N

□ 信大「知の森基金」活用で1000人の学生に3000万円規模の補助

濱田州博学長は5月22日の会見で「家計の急変やアルバイト先の休業などで学業の継続が難しくなる学生が出ると懸念される」と説明。個人や企業に寄付を呼び掛けている。寄付には税制上の優遇措置がある。信大公式ホームページにある専用サイトから申し込むか、振込用紙を電話で求めて振り込む。問い合わせは知の森基金事務局（電話：0263-37-2088）。

「知の森基金」→<https://www.shinshu-u.ac.jp/research/donation/covide19.html>

信大の学生は約1万1千人。約7割が県外から入学し、寮やアパートで暮らす。日本学生支援機構や政府による支援対象から漏れる学生を中心に独自の枠組みで支援。住居費や生活費などへの補填を想定している。知の森基金を活用した「緊急学生経済支援」は、先ずは、延べ1,000人の学生に総額3,000万円規模で実施する予定。

□ 当会の第24回総会、来年5月29日(土)に開催予定の幹事募集

ことしの23回物理会総会は中止となりましたが、来年の24回総会は松本の信大キャンパスで学生・院生の協力のもと開催予定。総会幹事のメンバーを一新しようと、総会幹事を公募することに。応募期間は10月15日まで。11月から活動を開始します。

・24回総会幹事応募ページ→

<http://www.supaa.com/postmail/postmail.html>

T O P I C S

□ 思誠寮の太鼓が歴史遺品として旧制松高記念館に保存される

本誌14Pで根建さんの「思誠寮列伝」にも登場しているが、思誠寮で使われた太

鼓1張りが、あがたの森の旧制高等学校記念館で、「松高、信大の歴史を物語る遺品」として保存されることになった。元寮生の有志らがお金を出し合って修繕し6月9日、記念館へ託した。思誠寮が取り壊されて37年、太鼓は“古巣”に戻ったことになる。

太鼓は胴の長さ約45センチ、膜の直径約35センチ。胴に「昭和十四(1939)年十月吉日贈松本片倉」の文字が彫られている。

1983年、横田に新寮が造られ、旧寮の解体前に閉寮祭が行われ、寮にあった太鼓2張りのうち、小さい方をOBの一人が持ち帰り、自宅で保管していた。昨年、自身も参加する元寮生有志の集まり「こまくさ会」の関係者に相談。同会は寄金を募り、9万円をかけて、伊那市内の工房で破れた皮の張り替えや胴の修理をしてもらった。

(MGプレス6/19より)

思誠寮の太鼓 歴史の遺品に
旧制高校記念館に元寮生有志ら託す

旧制松高高校(旧松高)の生寮として、松本市東町平キャンパス現がたの森公園に築かれた思誠寮(まごころ寮)で使われていた太鼓1張りが、あがたの森の旧制高等学校記念館で松高、信大の歴史を物語る遺品として保存されることになった。元寮生の有志らがお金を出し合って修繕し6月9日、記念館へ託した。思誠寮が取り壊されて37年、太鼓は“古巣”に戻ったことになる。(矢野啓明)

松高から信大 寮生と共に
太鼓は胴の長さ約45センチ、膜の直径約35センチ。胴に「昭和十四(1939)年十月吉日贈松本片倉」の文字が彫られている。膜の内側には「昭和十三年(1936)年十月吉日贈松本片倉」の文字が彫られている。元寮生有志の集まり「こまくさ会」の関係者に相談。同会は寄金を募り、9万円をかけて、伊那市内の工房で破れた皮の張り替えや胴の修理をしてもらった。

引継ぎされた37年、横田に新寮が造られ、旧寮は取り壊された。寮解体前に閉寮祭が行われ、寮にあった太鼓2張りのうち、小さい方をOBの一人が持ち帰り、自宅で保管していた。昨年、自身も参加する元寮生有志の集まり「こまくさ会」の関係者に相談。同会は11月の関係者参加者から寄金を募り、9万円をかけて、伊那市内の工房で破れた皮の張り替えや胴の修理をしてもらった。

「24」は旧制松高のころから使われてきた太鼓で、こまくさ会世襲事務

記念館で太鼓を見る(左から)鈴木さん、高山さん、館長の朝倉一樹さん

計 報

【2020年3月8日】松原正樹さん(文理10/松崎研究室)が亡くなりました。享年81。

【2020年6月22日】岡田菊夫さん(理学2S/電子研究室)が亡くなりました。享年72。

・心よりご冥福をお祈り申し上げます。

■ 追悼 ■ 岡田菊夫さん、どうぞ安らかに

神田 健三 (理学3S/統計研究室 中谷宇吉郎雪の科学館顧問 加賀市在住)

当会メーリングリストに、小林、斎藤両氏からの速報がありました。岡田菊夫さん(2S)が、去る年6月22日13時8分、9年近くにわたる闘病の末、ご逝去されました。享年72でした。

岡田さんは1967年に信大の物理科に入学、卒業して1971年に名古屋大学の大学院に進み、水圏科学研究所で大気中のエアロゾルの研究を行い、学位を得られました。そして、水圏研の助手を経て、1986年につくばの気象研究所に赴任し、2008年に定年退職し、その後は世田谷区桜丘で奥さんと2人で住まわれました。

私は、岡田さんの1年後輩(3S)ですが、私が入学する前年、岡田さんは森淳氏らと信州大学自然科学研究会を結成し、「怒涛のとりのくみの先頭に立って」(森氏談)推進されたそうです。

私が入学して最初の日、教養部校舎の北側にあったサークル長屋の自然研部室に立ち寄った時、岡田さんは気球につけるサーミスター温度計の調整の際中でした。

その初対面で、私は雪を調べたいのですと話すと、それじゃ自然研で一緒にやろう、と熱く入会を勧めて下さいました。それから50年余り、様々な機会に大変親しくさせていただきました。

岡田さんがその気球で行った松本平の逆転層の研究は、信州の特性をよくとらえたテーマであり、その後の大町公害の問題に対処する指針にもなりました。深夜から早朝にかけて、大学のグラウンドでの観測に私も参加しました。随分寒かったことや、夜明け近くに少し明るくなりかけた頃のポーとした気分を覚えています。

私が雪溪調査を始める時、岡田さんから励ましを受けました。私が1年の夏休みの時、郷里の喜多方で朝日新聞(1968.8.1)文化欄に載った樋口敬二先生(名大)の「雪溪の記録をとろう」の記事を読み、私は北アルプスの信州側で雪溪を調べたいと思いました。松本に戻り、岡田さんに最初にその話をしました。松の湯の近くの岡田さんの下宿から松本城まで歩き、岡田さんは、「恵まれた条件はなくても熱意があればできる、自然研で調査をやろう」と励ましてくれたのでした。それから、自然研の仲間呼びかけ、樋口先生との交流が始まり、調査地を涸沢に決め、試験休みの9月末に、7人で第1回調査に出発したのでした。



▲入学した年の6月末(1968.6.29~30)、森さん(左)に誘われ、岡田さん(中)と3人で初めて上高地へ行った。明神-徳沢間の河原で〔写真提供・神田健三〕

8年近く前、岡田さんは突然脳出血で倒れられ、意識がほとんどない状態での入院生活が始まりました。上京の機会に、私は奥さんに同行をお願いして、太平博久氏(6S)と一緒に見舞いに伺いました。はじめ、なかなか反応がなくて残念な気持ちになりましたが、気を取り直して、少し大きな声で「松本で、気球を上げて、逆転層を調べましたよね」と言うと、岡田さんは必死にこちらに目を向けるような反応をしてくれました。耳は聞こえているし、大事な記憶は蘇えるんだと確信できて、暖かい気持ちになったことを覚えています。

★

訃報に接し、奥さんに電話をかけました。コロナ禍の中、「看取りたい」との願いが許されたとのことでした。菊夫さんには「これまで、よく持ちこたえてくれた」と。尚、病院への行き来に同級の斎藤秀夫さんがずっと運転を買って出られて、本当に助けられた、とのことでした。

春寂寥!…自然研…逆転層…エアロゾル…涸沢雪溪…松本城。岡田さん、どうぞ安らかに。

<再掲> ■「同窓会費」は終身会費として1万円。『会計細則』決まる! ■

1. 同窓会費は終身会費として1万円とする。一括払いを原則とするが、本人からの申し出があった場合は事務局長が分割払いを認めることができる。

2. 事務局長名で金融機関に同窓会の口座を設ける。事務局長が通帳・印鑑を管理する。会計担当がカードを管理して口座からの出し入れなどを行う。
3. 在校生からの同窓会費徴収は、事務局が徴収日を決めて実施する。徴収後、在校生の会費支払い者リストは、すみやかに会長ほか、会計担当および関連事務局員に伝達する。
4. 金融機関への振込み手数料は会員の負担とする。
5. 会計担当は、年1回開催する総会を利用したり、メールで呼びかけたりして、卒業生からの会費徴収に勤める。
6. 毎年開催の同窓会総会における参加費の徴集など会計管理については、その年の幹事が担当し、事務局が補佐する。必要経費は事務局から事前に仮払いのかたちで支出できる。幹事は開催後しかるべく早く収支を事務局に報告し清算する。
7. 会計年度を4月から翌年3月とする。会計はすみやかに決算報告を作成して会計監査担当から監査を受ける。
8. 本細則の改正は総会で行う。

〒



▼下記いずれかの口座に | 同 | 窓 | 会 | 費 | のお振込みをお願いします！

◆郵便局の場合／通常郵便貯金 記号：11150 番号：20343411 口座名義：信大物理同窓会 代表者 武田三男（たけだみつお） 住所：390-8621 松本市旭 3-1-1

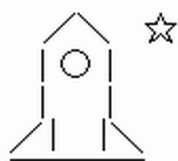
◆銀行の場合／八十二銀行 信州大学前支店 店番号：421 普通預金 口座番号：650215 口座名義：信大物理同窓会 代表者 武田三男（たけだみつお） 住所：390-8621 松本市旭 3-1-1

◎編集後記◎

◆・・・「外出自粛のテロップがNHK福岡のテレビ画面の左に、踊っていて、それが、緊急事態宣言が解除になって、僕は、7月1日から、九大のカーボンニュートラル・エネルギー国際研究所で、テクニカルスタッフとして働くことが決まって、大学指定の健康診断で、久しぶりに、中洲川端まで、出向き、天神のジュンク堂書店に立ち寄って、この本に出会った。『コロナ時代の僕ら』。イタリアのSF作家が書いたエッセイである。「今、コロナウィルスの流行が、僕らの時代最大の公衆衛生上の緊急事態となりつつある。この手の危機は初めてではない。これが最後ということもなければ、もっとも恐ろしい危機となることもないかもしれない」。非常に明晰な文章が、綴られている。

◆・・・今回は、銀嶺祭の話を書いた。現在の学生に聞くと、飲み会の後には必ず歌われていた「春寂寥」も、やらないという。先輩方が築いた伝統や、舞台を、僕らは、享受するだけで、それを、守るということ、しなかったことが、悔やまれる。今からでも遅くない、後学の徒に、なにか、できることは、ないのだろうか？ (AK)

★・・・吉田新理学部長のインタビューの中に2つのバーチャルな研究所のお話がありました。「宇宙研究所」と「信州数理科学研究センター」。先日、栗林教授とメールのやり取りをした際に、信州数理科学研究センターHPの場所ををて頂きました。



(<http://math.shinshu-u.ac.jp/~center/>)。数学はわからないので、恐々覗いて見ると、物理系の話にも結構リンクが貼られていました。研究報告書には、素粒子理論系の先生方のお名前も。開かれている研究会は、数学から物理（物性関係も含む）、化学、経済学などといった広範なもののように、数理科学に興味

のある方は是非覗いてみて下さい。なかなか難しいようですが、リアルな研究所の姿も早く見たいものです。 (NA)

◇・・・依然パンデミックが続く新型コロナ対策に関して、理学部長（吉田先生）とのインタビューをはじめ大学での状況報告に加えて、同窓会員仲間達からドイツそしてアメリカからの報告など様々な面での生の状況をお伝えできる貴重な寄稿を頂きました。ビジネスにおいても教育界においても、新型コロナとの今後の長い共存の中で如何に対応していくか、新しい体制、ニュー・ノーマルの構築が迫られています。一方、大先輩の方々から、自然に恵まれた松本の地「あがたの森」礼賛（元学長の宮地先生）、そして思誠寮の古き良き時代の報告（前同窓会長の根建さん）など、心温まる寄稿にほっと安堵感を覚えます。ご寄稿、誠に有難うございました。 (HT)

●・・・1月の終わり頃から始まった我が国の新型コロナ騒動は、その対応のまずさに「日本でこんな国だったのか」という嘆きとともに、この5か月間、政治、経済、社会の欠陥と為政者の質の悪さをイヤというほど見せつけられた。これもひとつのコロナの功名？ 一方、すべての大学の授業がオンラインに切り替わった。こちらのほうは、じつは意外と評価が高い。Zoom、Meet、Skypeといった ICT による映像通話ソフトが出来ていたことが幸いし、これが授業に活用されている。先生は出欠を取る必要がなく、学生は分からないところをもう一台別のパソコンで調べることもできる。また、世界中の有名大学の人気講義を無料で視聴できる「MOOCs (ムークス)」という公開講座もあるという。新型コロナのおかげで、否応なく教育に対する意識を変えていかざるをえなくなったようだ。

●・・・3月に松原正樹先輩が先立たれた。この会の創立当初から関わってきた小生からみて、松原さんこそ会の最高功労者であり、また立役者であったと思う。当初の設立発起人は、松原さん勤務の新宿にあったオリンパス光学別館を借り、平日の夜に集まっては会議を開かせてもらった。どんな依頼にもイヤな顔をせず、様々な相談に親身になった応えてくださった。副会長、編集委員、会計監査役と役員をこなし、当然、会長に就任する資格と技量をお持ちであったが、固辞され続け、遂には会長に就くことは無かった。葬儀には「散骨」を希望されたが、奥様のはからいで「樹木葬」として眠られた。幼いころに満州の奥地から引き揚げてこられたが、その体験が生涯離れなかったのでは、とは奥様の弁。すがすがしくもさわやかな一陣の風が樹木を揺らせていることだろう。そしてこのたび、当会の大学支援の記事をお読みになった奥様から、当会宛てに多額のご寄付を頂戴した。合掌。(MT)

=====
● 信州大学物理同窓会会報 0073 号 (2020 年夏号) SUPAA BULLETIN No. 73 ●

● 2020 年 6 月 25 日発行 ●

□ 編集・発行／信大物理同窓会事務局

□ 編集長：高藤 惇 □ 発行人：太平 博久

《編集委員》高藤 惇(2S) 渡辺 規夫(4S) 太平 博久(6S) 足助尚志 (17S) 來田歩 (22S)

■当会報のバックナンバー閲覧サイト：<http://www.supaa.com/kaiho/index.html>

■当会へのお問い合わせ先：<http://www.supaa.com/postmail/postmail.html>

=====
(C)信州大学物理同窓会事務局 無断複製・転載を禁ず

